

覧になられたのだから、北緯七〇度ぐらいのヘルシンキだったら、絶対に見えるに違いない。ヘルシンキに住んでいる大使が何でオーロラを見ていないのかと、ご不審を抱かれたわけでしょう。私も何か申し訳ないような気がしまして、ヘルシンキに帰ってから国立天文台に行つていろいろ聴き、ビデオなども見せてもらいました。しかし、調べれば調べるほど、オーロラはものすごく運のいい人だけが見られるものなのだと思います。ビデオやスチール写真などを天文台から取り寄せて、昭和天皇に献上と言いますか、納めさせて頂いたことがございました。

今の陛下は皇太子時代に、二十五年ぐらい前になります。私がバンコックにおりましたときに、美智子妃殿下ともにおいでになりました。そのときは、お昼ご飯もそこそこに待ちかねたように、お魚が大好きなものですから、池にお魚を掬いに行かれるわけです。なにしろハゼの大家です。お帰りになったあとタイの国中からいろいろな種類のハゼを取り寄せまして、陛下にお送りするというのもございました。タイの軍隊が動員されて、ハゼを集めてくれたということもありました。最近、新聞の社説にちよつと出ておりましたけれども、かつて陛下はタイで蛋白源に困つておられることを知られて、ナイル川のテラピアとかいう稚魚を取り寄せられて、それをタイに送られた。それがだんだん増えて、タイの蛋白源になつておられる。この前、バングラデシユで大洪水があつたとき、タイからバングラデシユにこの魚が送られたとのこと、たいへん役に立っているようにございます。

六年ぐらい前ですが、私がヘルシンキにいたときに、皇太子・美智子妃殿下がおいでになり

フィンランドは大歓迎をいたしました。初めはこちらも新聞に取り上げてもらいたいものですが、いろいろ資料を送りつけるのですが、いっこうに取り上げる気配がない。こちらはハラハラして催促したりしたのですが、向こうはそんなにあわてる必要はない、そんなに前に載つてもみんな忘れてしまうから、直前の2、3日前でいいと、こう言うのです。本当に本番のちよつと前になると、ありとあらゆる新聞に、



北欧の森で親しく取材に応じられる両陛下

日本の皇室のことは何でも書いてあるような特集号が出ました。しかも、われわれですとヘッドラインだけ見て、ああ、あの記事かといった感じですが、フィンランドの人たちは非常に字を大事にする国民なのです。たとえば、博物館などに行きましても、われわれだったら目玉はどれだと聴いてそれだけしか見ないといった傾

向があります。向こうには、字が書いてあればそれを克明に読むという国民性があるわけですね。ですからこの特集号をものごくよく読んで、皇室一家のことならばみんなわれわれ以上によく知つておられるという感じでした。

ある丘の上に作曲家シベリウスの住んでいた家があります。公式日程がすんで、シベリウスの家を訪問されるときに、細かい日程は知らされていなくて、地元の人たちが出迎えられるだろうということ、地元の人たちが出迎えられるわけです。そうすると、殿下はすぐその人たち一人一人にご挨拶に行かれるのです。われわれはここは何時何分とスケジュールを組んであるものですが、「殿下、もうちよつとお急ぎください」と、私はもつぱら急かせ役でした。それは6月、夏至の前だったので、丘の途中の草むらにスズランの花が咲いていたのです。妃殿下がそこにしゃがみ込まれて花を見られたのですが、地元の新聞記者が「その花を摘んでみてください、地元の新聞記者が「その花を摘んでみてください」と注文したところ、妃殿下は「いえや、野の花は野に置いといますから」と言われまして。そのお言葉を翻訳が紹介したわけです。それを聴いたフィンランドのカメラマンは、妃殿下をどつと取り囲んで一斉に撮影したのです。翌日の新聞の一面にスズランの花を慈しむ妃殿下の、なんとも言えないすばらしい写真が載りました。そういうことは日本ではおそろしく紹介されなかつたと思うのですが、現地ではこの写真が、妃殿下が「野の花は野に置け」と言われた、というキャプションつきで全国津々浦々に報道されました。フィンランドには自然を愛するという国民性がありますから、あそここの人たちの胸には、ものすごく琴線に触れるところがあるわけです。しかも、スズランは日

本の桜と同じように、フィンランドでは国の花なのです。ですからなおさら、向こうの人たちが感激したのです。

後日談になります。ソ連との国境付近に、サブリナという昔のお城があります。リンナというのはお城という意味です。そこで夏の間オペラなどが行われるのですが、そのお城にも最後の日に行かれました。湖がたくさんある所を通るのですが、途中生まれたばかりのアザラシがいます。そこの人たちが両陛下に、「名前をつけてやってください」と頼んだのです。船の上でお二方がずっとご相談をされておられたのですが、最後に「幸(サチ)」という名前をつけられて、しかもサチにはフィンランド語には変な意味がないかを調べられて、その名前をあげられました。このことからわかる通りとても気配りをされる方々です。やはり同じ船の上の話ですが、サブリナでは毎年オペラ祭がありまして、そこに日本からオペラが来てくれないかという要望がありました。すぐには実現しませんでした。昨年それが実現しました。ジャパンウィークというのがあります。日本から東京管弦楽団も参加してマダム・バタフライを上演し、盛大な実現をみました。こうして見ますと、われわれ外交官が何百人海外に出て一生懸命やってもできないことを、皇室外交は、ほんの数日のご滞在でやっつける。先ほどのスズランの話のように、相手の国民の胸に深く入っていく、ものすごい効果があるわけです。

たまたま、現在、天皇・皇后両陛下はご即位後始めてアセアン3国を回られて明日お帰りになります。新聞で拝見しますと、バンコックでも市民と言いますか、みんなに溶け込んで親善

を図ろうとするご様子で、ご一緒した王女方が困っておられたふうだと書いてありますが、バンコックにいた私にはよくわかります。バンコックでは、目上の人に挨拶するときはへりくだり、王様の前などでは、大臣であろうと握手はできない、床に横になるというか這いつくばって挨拶するわけです。向こうの王室はものすごく国民に尊敬されており、王室もまた国民の不満などを一生懸命吸収しようとしておられますけれど、今度の天皇・皇后両陛下のように、民衆の中に入っていく、一緒に話をしたり手を握られたりという王室のスタイルは、バンコックではありえないことです。新聞流に言いますと平成流の皇室外交のアプローチには、陛下のお人柄が実によく表れております。これを皮切りとして、世界各国との親善が、皇室を通じて盛んになることは結構だと思えます。

私も短期間ですがご一緒させて頂いた経験から申し上げますと、今の天皇・皇后両陛下は人のことをよく考えて、しかも名前はよく記憶しておられます。何かの時には気さくに又通をされます。陛下になられて、どこまで殿下時代のやり方をされておられるかは存じ上げませんが、お気持ちとしてはこれまで通りにやられるということであれば、たいへんいいのではないかと思います。

私がバンコックで一緒したときは、まだたいへんお若かったです。日本に留学したタイの人たちの会館がありまして、そこで陛下にお言葉を述べて頂くということがあります。タイから上野の動物園に、たしか花子さんと言いましたか、象が贈られました。そこで当時の皇太子が行かれてお礼のお言葉を述べられたわけです。壇上に上がられてお礼の書類を「本日

ここに」と読み上げて、そこでお言葉が止まって、ひよいとお供の人にその書類を返されたのです。するとお供の人はなに食わぬ顔で別の書類をハイと渡され、殿下はそれを読まれたのですけれども、お供の人がまちがってよその場所のお言葉の書類をお渡ししていたわけです。「本日ここに」まで読んで、あっ、これは違うというので、書類を返された。それが非常に自然なのです。返されたほうも当たり前みたいな顔をして、別の書類を渡しているのです。昔だったら切腹ものですが、そのような光景を横から見たりしまして、非常にほほえましいと思えました。

今は天皇・皇后両陛下として海外親善を終えられて明日帰って参ります。また、ほかの皇室の方々もすでに海外で勉強されて、いろいろ外との交渉があたりです。相手、国に合った形で活躍頂き、今まで述べたような皇室外交がますます広がれば、イギリスの王室外交なみのお働きを期待させて頂けるものと思います。思い起こすままに、取り留めのないおしゃべりとなりまして、時間が来ましたのでこれで終わらせて頂きます。

ご静聴ありがとうございました。

